災害記憶継承に向けた出版活動
-2015 年ネパール地震を事例として-

Book Publishing Activity Towards the Disaster Memory Inheritance
-Case study of 2015 Nepal earthquake-

サキャ ラタ[1]・大窪 健之[2]・金 度源[3]

Shakya Lata[1], Okubo Takeyuki[2] and Kim Dowon[3]

[1]立命館大学准教授　衣笠総合研究機構　歴史都市防災研究所（〒603-8341 京都市北区小松原北町58）
Associate Professor, Inst. of Disaster Mitigation for Urban Cultural Heritage, Ritsumeikan University
[2]立命館大学教授　理工学部環境都市工学科（〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1）
Professor, Dept. of Civil and environmental Engineering, Ritsumeikan University
[3]立命館大学准教授　理工学部環境都市工学科（〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1）
Associate Professor, Dept. of Civil and environmental Engineering, Ritsumeikan University

This paper describes the process of publishing “a disaster memory book” towards disaster memory inheritance and the lesson learning process from past disaster. Normally, people forget the happenings, their struggles of the disaster time, and the post-disaster recovery processes. Before the 2015 Nepal earthquake, Nepal has experienced many disasters including the biggest earthquake in 1934 but since there does not exist any kind of documentation explained detail the condition of evacuation sites, the victim’s experience and their responses, the lessons from past disaster memories could not be included in disaster risk reduction strategy. Thus our team planned to compile a book as “the memory of the 2015 Nepal earthquake, experiences of local residents utilizing traditional resources”, which contents are based on field surveys conducted immediately after the earthquake.

Keywords: *disaster memory, inheritance, disaster mitigation, 2015 Nepal earthquake, publishment, local community*

１．はじめに

本稿では、筆者らによる一連の調査研究に基づいて災害の記憶継承を目指した出版活動について報告をする。災害は起きて時間が経過すると忘れて行く。災害時の恐ろしさ、悲しさ、困難さ、そして、それらを如何に乗り越えたかを次世代に伝える必要があり、そこからの教訓こそが防災・減災につながる[1)]。

2015年ネパール地震から今年4月で5年たつ。復興活動はゆっくりだが、少しずつ進んでおり、被災地では、再建済みまたは、再建中の住宅や文化遺産

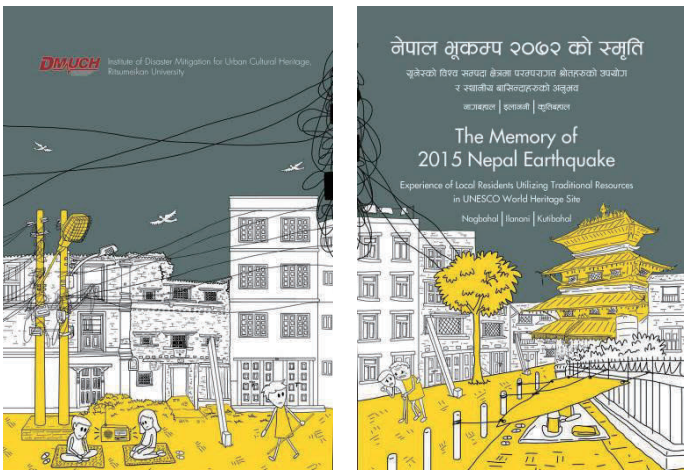

写真１　出版物の表紙（左：裏表、右：表紙）

が数多くみられる。震災直後から1・2年は建物の耐震強化や備蓄を含めた防災活動に国民の興味が多く寄せられていた。しかし、時間が立つにつれ、震災前と同様な高層化した民家が多くみられ、国民の防災・減災に対する意識も薄れつつある。

筆者らは2008年からネパールの歴史都市パタンを対象とした防災計画研究および防災まちづくり活動を行ってきた[2)3)]。2015年の震災直後も地域コミュニティを対象とした集団インタビューや被災者世帯を対象とした個別インタビュー調査を行い、避難生活の状況や地域コミュニティによる共同的災害対応について明らかにした[4)]。しかし、当時のインタビュー調査および地域コミュニティとの集団インタビューで得られた被災者の生の声をそのままにするのではなく、集合的記憶として捉えられ、その教訓を今後の災害対策に行かせられるよう出版することが重要と考え、特に現地の被災者がより活用できる形で出版活動を行うに至った。

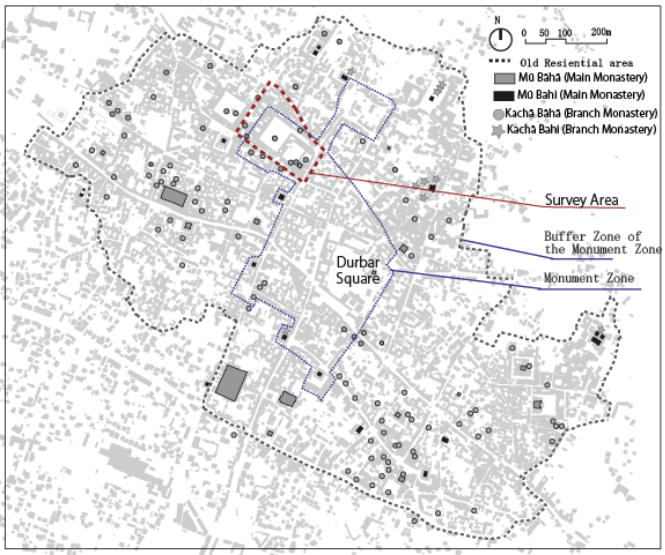

図１　ラリトプル市パタン旧市街地と研究対象地の街区

2. 対象地の概要と調査方法

調査対象地はネパールの首都圏カトマンズ盆地パタン旧市街地の世界遺産範囲内に位置する街区である（図1）。この街区の中心にはナグバハ、イラナニ、クティバハという三つの中庭とその中庭を介した地域コミュニティ・トル（町内会）が存在する。また、対象街区内には、これらの中庭以外に観光地でもあるクワバハ（ゴルデン・テンプル）が位置する他、複数の小規模の中庭が存在する（図2）。筆者はこれまでの一連の研究[5)]において、中庭空間が宗教性および居住性が重なり合う重要な居住空間であることを示している[6)]。震災時にこれらの伝統的中庭をどう活用し、中庭を囲む4～5建ての垂直型ネワール民家に生活する被災者の経験を当出版物にまとめている。

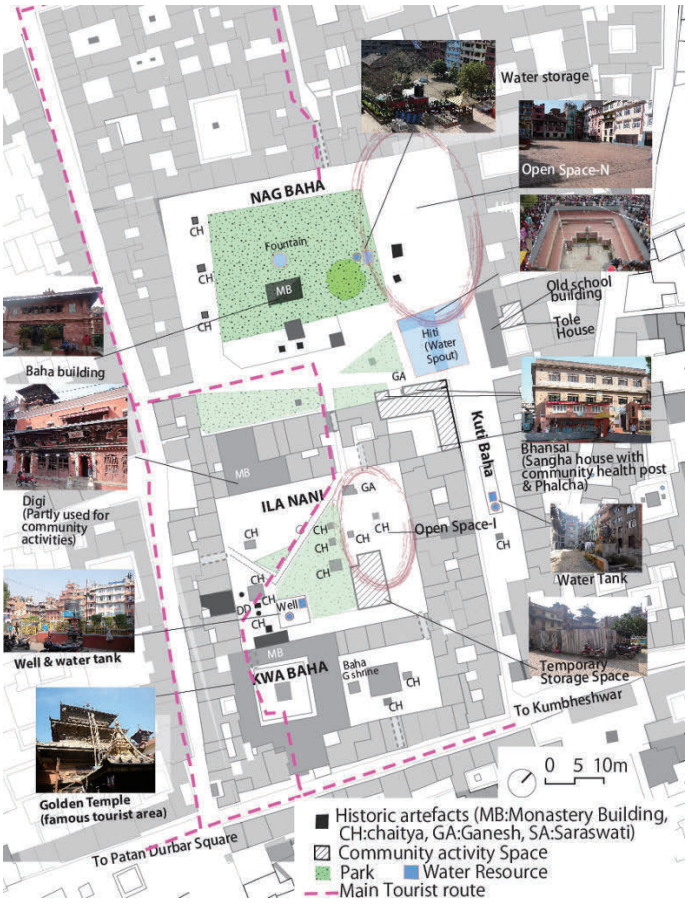

図2　調査対象の街区

出版物の内容のほとんどは震災直後の個別および集団インタビュー調査で得られた発言であるが、個別インタビューは55名に2015年11月30から12月5日にかけて実施しており、5日にはナグバハ、イラナニ、クティバハという3つのトル（町内会）のトルリーダーや有識者、居住者を対象として集団インタビューを行っている。

個別インタビュー調査は、対象街区内の表中庭・裏中庭に隣接している住居から各中庭で1世帯以上をランダムに訪問して地震発生から調査時までの生活の様子をあらかじめ用意した質問項目に沿って行った。集

団インタビューはナグバハ，クティバハ，イラナニの3つのトルからの参加者を各々のグループに分け，各中庭における地震発生から調査当時までの様子をグループ内で話し合いながらベースマップ上に記載してもらった。参加者数はナグバハルからは6人，クティバハルからは3人，イラナニからは4人の計13人である。

３．災害記憶継承のための出版物の企画

表１　出版物の企画内容

継承の対象「誰に」	■被災地の方々、国内外の方々、支援活動に関わる方々、専門家、など
継承の内容「何を」	■被災した方々の体験・経験・想い ■歴史都市の居住文化・地域資源を活かした災害対応・課題・教訓
継承の方法「どのように」	■英語とネパール語のバイリンガルの出版物 ■「イラスト」を中心とした表現 ■現地の地域コミュニティを初め、自治体、教育機関の図書館に寄贈
継承の主体「誰が」	■対象地の地域コミュニティ（トル） ■自治体 ■現地の教育機関（小中高等学校、大学） ■立命館大学歴史都市防災研究所

出版物の企画の際は、災害記憶継承ということで、継承の対象、継承の内容、継承の方法、継承の主体を表１の通りとし、出版企画を進めた。

災害記憶継承の対象は被災者やその後世を初め、災害復興の支援に関わる国内外の支援者・専門家など広範囲とした。継承内容は主に被災者の経験を示し、災害の恐怖・災害対応の課題・教訓を伝え、防災教育・防災活動に活かすこととした。その際は、現地の居住文化、歴史環境や歴史空間の特性を表現することに着目し、これらが災害時に如何に変化し、また、如何に活用されたかを示すことで、伝統的地域資源の再評価を目指した。

継承方法は、出版物を学術的なものだけではなく、子ども・高齢の方々など多世代が気軽に読みやすいものにするため、「イラスト」中心とした上で、「ネパール語」と「英語」のバイリンガル言語で記載し、国際社会においても読み物になるよう努めた。また、多くの方々に目を通してもらえるよう現地の地域コミュニティを初め、自治体、教育機関の図書館に寄贈することとした。継承の主体は、対象地の地域コミュニティ、自治体、教育機関そして筆者ら所属の研究所といえる。今回の出版活動においては現地の方々に編集や印刷過程に参加させることで、地域コミュニティが受け身ではなく、主体としても実感してもらうこと、また、出版イベントの開催などを通して、災害記憶の共有と今後の防災まちづくり活動に積極的に参加してもらうことを目指した。

４．出版物のデータ整理・構成

被災者個人の経験をそのまま表現するものは出版物の内容の80％占めるようにし、研究として取り組んで得られた成果を示すものはコラムとしてまとめた。また、歴史都市の居住文化についての下地知識としてAppendixという形で記事も載せた（図3）。

CONTENTS

Foreword 2
Preface 5
EXPERIENCES OF LOCAL RESIDENTS
At the moment of the earthquake 7
Immediately after the earthquake 23
Evacuation Life Phase 35
- Evacuation to traditional courtyards 37
- Living condition and resoponse of community 49
- Involvement of community in supporting activities 64
- Problems during evacuation life 69
- Positive aspects from the evacuation life experience 79
- Lessons learned from the evacuation life experience 83
Temporary Living Phase 87
COLUMN: Outcomes of Community Based Research Activities 93
- How to prepare for future disaster 96
- Disaster mitigation map 100
- Disaster mitigation measures 103
- Useful goods during the evacution life 104
Appendix 111
Profiles and Personal Notes of Contributers 119
Acknowledgement 135

図3　出版物内の目次

（１）「被災者の経験」の内容

まず、被災者の経験談を①震災時、②震災直後、③避難生活期、④仮住まい期という復興過程のフェーズごとに分けた。また、各フェーズの中でも①では「最初に感じたこと」「最初の反応」、②では「オープンスペースまで避難した時の状況」、③では伝統的「中庭空間の状況」「生活の実態と地域コミュニティの対応」「地域コミュニティによる支援活動」「避難生活時の課題」「避難生活期に見られたポジティブなこと」「避難生活経験からの教訓」、④では「自宅戻ってからの空間利用の変化」という小見出しにした。それぞれの見出しには2つ以上のイラストや被災者からの発言を記載した。

（２）研究成果を示す「コラム」の内容

これまでの筆者らによる防災まちづくり活動から得られた成果を「将来の災害にどう備えるべきか」とい

うタイトルにして掲載した。成果①としては防災マップ、成果②はナグバハ地区防災指針、成果③は避難生活期に役に立った物（備蓄品リスト）である（図4, 図5）。

図4　成果①防災マップ

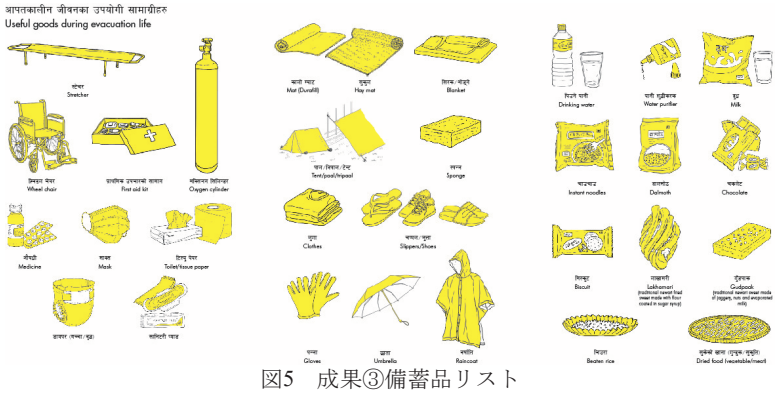

図5　成果③備蓄品リスト

（３）その他

Appendixには被災地の階毎で生活空間を分離するネワール民家の特性および仏教僧院の建物やモニュメントと民家が共存する中庭型集住体の特性について掲載した（図6, 図7）。また、一連の研究調査および出版活動に貢献した著者、現地の協力者からのメッセージも記載し、地域の人々に馴染んでもらえる工夫をした。

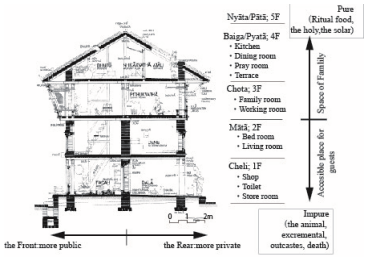

図6 ネワール民家の空間構成

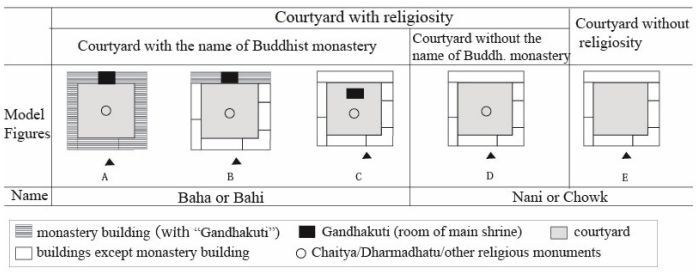

図7　宗教性と居住性の観点から見た中庭空間の類型

5. 出版物が示す地域資源と災害記憶継承・教訓

出版の内容としては被災者からの発言そのまま載せているが、その背景にある被災地の特性である伝統的民家（5階建て以上の民家）や伝統的中庭空間（仏舎利等の存在）については詳細にイラストで示した。

（１）伝統的市街地ならではの恐怖

5階建て以上の民家であるため、上階部からオープンスペースまでの避難が困難であること（図8, 9）、中庭からオープンスペースまでの通路・路地（ガッリ）が崩れる恐怖（図10）、震災による伝統的民家の木製の扉が開かなくなり、閉じ込められた恐怖（図11, 12）を表現した。

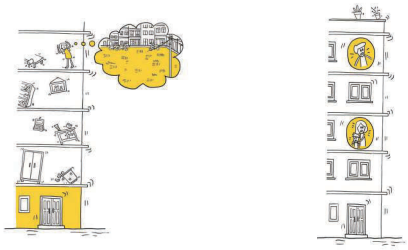

図 8　５階建て以上のネワール民家の上階部からオープンスペースまでの避難の困難性

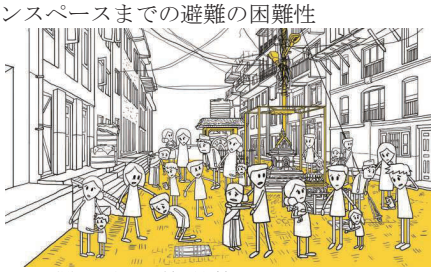

図9　避難の様子（伝統的中庭を表現している）

（２）伝統的市街地ならではの安心感（空間の利活用と地域コミュニティの対応）

街区内に広い中庭があることで、被災者は自宅の近くに避難生活を送ることができた。避難生活に必要な物は、すぐに自宅から持って来れた。各世帯へのスペース配分（寝具をおくスペース）、炊き出し手配、情報発信など避難所としての機能が果たせるよう地域コミュニティが災害対応を行っていた。これらの各場面を図13, 図14のようなイラストによって表現した。

図10　トンネル上の通路での避難状況

図11　民家の木製扉が開けられず、閉じこめられた状況と恐怖

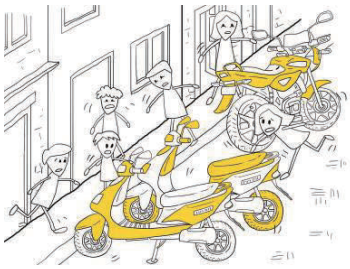

図12　民家前がバイク置き場になったことでの避難困難

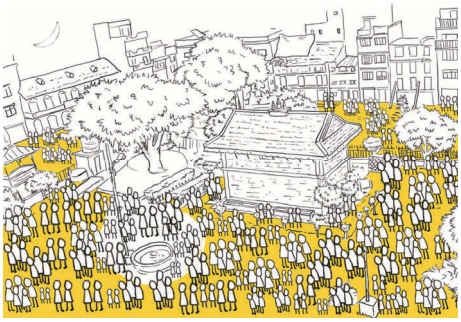

図13　避難場所となったナグバハル中庭

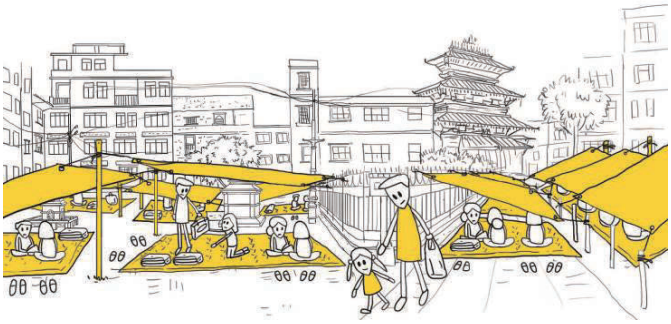

図14　世界遺産区域内の中庭空間が避難所として利用されている様子

（３）避難所対応マネジメントの課題

子どもや介助の必要な高齢者がいることでプライバシーに関する問題や限られたトイレの利用など多くの被災者が感じていた。限られた場所でいかに避難生活を乗り越えるかが課題だった。行政からは少量の物資が提供されたが、課題は避難所となった中庭が事前に避難所として登録されていたにも関わらず、収容被災者の人数・必要な物資の推測などのステップを踏まえたものではなかった。そのため、テントは5枚、限られた飲料と食糧であった。それが、大勢な被災者に如何に平等に配布するかマネジメントが課題となった。

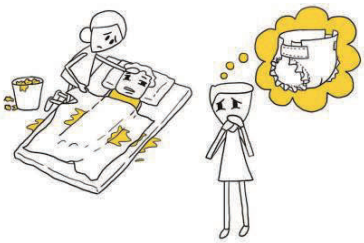

図15「寝たきりの高齢者はオムツがなく、近くにいられなかった」

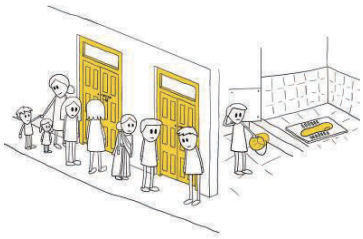

図16「トイレの待ち時間が長かった」

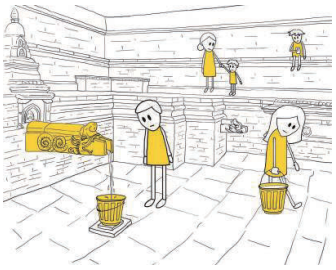

図17「伝統的水汲み場の水は洗い物などに利用できていた」

（４）防災計画・備蓄計画への示唆

避難生活においては被災者各自が自宅から寝具、食料を運んで生活したが、被災の多い民家の場合はそれができず、地域コミュニティに頼るしかない世帯も少数いた。今回、個人・行政・地域コミュニティの共同的対応についてイラスト付きで表現できたこと、研究成果も含められたことは、今後の災害の備えのための意義のある出版物になったと考えている。また、将来的には地区防災計画・備蓄計画などにも示唆できるものだと考える。

６．出版イベントを通した災害記憶の共有

出版記念イベントは、トル・コミティ（町内会）と共同で開催し、区長がメインゲスト、トリブワン大学IOE center of Disaster Studiesの教授、Kwopa Engineering Collageの教授、JICAの専門家などをゲストとして招くことができた。当イベントにはトル・コミティが主催する他のイベントと同様に大勢のトルの人々が参加された。その他、建築・土木の専門家、自治体として第16区のDisaster management committeeの役員や青年会の方々など計200人弱が参加していた。また、イベント後は約250刷の本をトル会長に寄贈し、イベントに参加されなかった方々や近隣の地域にもわたるようにした。そのほか、地区内外の小学校や図書館にも配布した。地域コミュニティ・行政・大学といった多様な主体が同じ場所で災害の記憶を共有できた。

写真2　出版記念イベント

写真3　イベントの参加者

写真4　出版物を地域に配布できるようトル会長に寄贈

７．おわりに

本稿では、これまで取り組んできた防災まちづくり活動や調査研究を災害記憶の継承に向けた出版物として如何につなげたかを紹介した。災害の記憶を記録し、それを多様な主体で共有するこの試みは現地にとっては初めてのことである。災害の教訓を地域防災に活かすには、今後も継続的な防災まちづくり活動が必要であり、筆者らは今後も継続的な研究活動を行う所存である。

謝辞：現地調査および出版活動においてはナグバハ・トル・コミティの会長Juju Ratna Shakya, Rabin Shakya, 調査や編集においてはChandani Shakya, Sarina Shakya, Padma Shakya, Rimishna Manandharに多大の協力をいただいた。本研究と出版事業は、立命館大学歴史都市防災研究所研究施設運営支援費による補助を得て実施したものである。記して感謝を表す。

参考文献

1) 阪本 真由美：災害ミュージアムを通した集合的記憶の形成 －阪神・淡路大震災と人と防災未来センター、Research Paper of the Anthropological Institute Vol.4 (2017)、pp88-98,、2017.
2) Research Center for Disaster Mitigation of Urban Cultural Heritage, Ritsumeikan University, Disaster Risk Management for the Historic City of Patan, Final Report of the Kathmandu Research Project, 2012.
3) 長嶋治樹・大窪健之・林倫子：世界遺産カトマンズ・パタン地区における地区防災計画を実践するための活動指針の提案-防災ワークショップによる住民評価を通して-, 歴史都市防災論文集, Vol.7, p.201-208, 2013.
4) 高杉 三四郎, 大窪 健之, ラタ サキャ, 金 度源, 林 倫子：2015年ゴルカ地震における伝統的中庭空間の避難時の利用実態：世界遺産カトマンズ・パタン地区を対象に 、歴史都市防災論文集 = Proc. of urban cultural heritage disaster mitigation 10 195 - 202 2016年7月9日
5) サキャ　ラタ：ネパールの歴史都市における中庭型集住体の共用空間の管理システムに関する研究-パタン旧市街地を対象として-, 京都大学大学, 博士学位論文, 2013.
6) Lata Shakya, Mitsuo Takada, Kiyoko Kanki：Spatial structure of a courtyard-style settlement originating from a Buddhist monastery: A study of a cooperative space management system in an old city area of Patan, part 1,Architectural Institute of Japan, Japan Architectural Review 3(3) 344 – 358, 2018.4